

【発達のかえ方】

子どもの発達（1）乳幼児の発達～発達症（障害）の理解の基本となる基礎的な発達心理学の知識～

○発達とは…生物学的構造や機能が、文化、多様化、複雑化していく過程に、学習（経験、練習、訓練、教育）が加わった現象。機能的な成熟。

★発達症・発達障害の基盤として子どもの発達を理解していくうえで、定型発達を理解することは大切。

★発達症（障害）は発達心理学の発達理論に基づいている。

遺伝と環境

★成長、発語は環境要因にはならない。

発達の原則

★発達とは「できるようになること」ではなく変化（獲得と喪失）の過程。

発達の凸凹とは（発達領域として）

○できること、できないことではなく発達がゆっくりしている ○得意・不得意が凸凹している

「発達段階」と生涯発達

発達段階…発達はひとつずつの段階を昇っていくようなものという考え方

生涯発達…できるようになること、よくなることだけが発達ではなく、変わらないこと、衰えることなど、変化その物が発達と考える。生涯を通して人は発達するという考え方。

ピアジェの発達理論

○ピアジェによる発達理論 ○ピアジェの3つの山課題

Joint-attention（共同注意）

共同注意とは…他者と事物に注意を配分し共有すること（視覚的共同注意、聴覚的共同注意、触覚的共同注意）

【共同注意の発達】生後9か月ごろの乳児は三項関係が主体になった行動が可能になる→指さし＋喃語→養育者など周りの人たちの関心を巻き込み共有するようになる→共同注意の成立

共同注意の種類・指さし・見る・見せる・渡す・参照視

指さしの種類・心理学の研究でよく使われる指さしの分類…要求の指さし、叙述の指さし

・幼児教育、保育現場、母子保健でよく使われる指さしの分類…要求の指さし、定位の指さし、可逆の指さし

心の理論：誤信念・誤信念の理解…「他の人は自分が知っている事実とは異なることを信じていることがある」ことを知っている 4歳後半から6歳の間には獲得される

・自己の誤信念の想起…現在、自分が知っている事実とは異なる過去の自分自身を思い出す

見かけと現実の区別…本当の現実と見かけの区別をする

・誤信念課題 …位置移動課題：サリーとアンの課題、内容変化課題・スマーティー課題

ASDと心の理論

・幼児期には誤信念課題を通過できないが、7歳から12歳ごろに獲得しているようだ・自閉症の中にも誤信念課題を通過できるものもある・言語理解の問題？分化固有がありそう・聴覚障害児や視覚障害児にも獲得できないものがあり、自閉症と特異とは言い難い・むしろ実行機能の発達問題なのでは？

心の理論：遊びの発達への影響

ASD「興味・情動・または感情を共有することの少なさ」…相手が何を求めているのかわからない。徐々に発達する

愛着の発達

○大事なアタッチメント部分

安全基地「お母さんのおひざ」…安心して探索行動を続けることにより環境に働きかける力がつく

移行対象…アタッチメントが成立後、その人物を思わせるような毛布やぬいぐるみなどが、安心を取り戻す為の材料となるていく

愛着形成に重要なのは、量的な関わりの保障ではなく、質的な関わりの保障である

育児の多様性を認めながら愛着を育てる子育てを支援

愛着の育ちの困難：不適切な養育

大人の子どもに対する不適切な関わり…「明らかに危険が予想されたり、子どもが苦痛を受けている」

学校や塾の教師など、保育士などによる体罰など家庭外の不当な行為も含まれる

不適切な養育によるトラウマ障害

・反応性愛着障害 ・脱抑制型愛着障害

愛着障害と発達障害

・環境的（養育的）な要因と発達の要因・愛着障害は「育てなおし」による治療が可能（脳の変化）・発達障害は環境支援により自分らしく生きることが可能

発達障害と愛着障害の違い

・発達障害の場合…親が働きかけても子どもが応じない、親が子どもの独特の反応がわからない、親が関係が成立しない、持続しないことによって、関わりをやめてしまう可能性の為に、アタッチメントが成立しない可能性が高い

・愛着障害の場合…子どもが反応がないことによって関わりをやめてしまう、子どもにとってわかりやすい、子どもに合った関わりをしないことによって、アタッチメントが成立しない可能性がある

★育児不安や障害の子どもを育てるストレスによる養育困難な歪みが生じて虐待になることもあるが、イコールではない